検出された。以後、昭和五十九年（一九八四）まで〇～十一件のコレラ菌陽性の食品が流入した。食品はエビ類が主で、輸入先はタイ、インド、フィリッピン、台湾、インドネシアである。

コレラ菌が発見されておよそ百年経て、ようやく食品からコレラ菌が検出されるようになった。したがって、それ以前に禁忌食品とされたものは推量に過ぎず、恐らくコレラ予防には役立たなかったと考えられる。

（平成十五年九月例会）

中神琴渓引書攷
その医学思想についての文献学的概観

舘野　正美

中神琴渓（寛保四（一七四四）年～天保四（一八三三）年）、一代の天才的医家である。一時、吉益東洞の門をくぐってその教えを受け、彼自身も東洞を尊称しつつ、それでも尚〈規則を離れ〉た融通無碍の治療法を展開し、大いに実績を挙げて活躍した、文字通り、稀代の傑物である。

琴渓のこの自在闊達の天性は、遺体の解剖に立ち合い、傷寒・金匱に縛られない臨機応変の処方を施したことでも十分に伺われる所ではあるが、更に、実際いささか皮肉なことながら、一時は〝三千人〟と言われた門弟に〈口授面命〉の教えを施しつつも、真の〝中神流〟の後継者は、遂に一人も現われて来なかったという事実を見ても、また明らけし所であろう。正に〝一代限り〟の天才であった。

さて、この中神琴渓が一体いかなる医学思想を有していたかということは、彼の上記の如き人物像からして、極めて興味が持たれる所である。そして又、その医学思想を解明することは、ひとり江戸時代の古医方の流れを明らかにするのみならず、日本人的医療観・医学思想のあり方を省みる上でも、裨益する所まことに大なりと思われるのである。

とはいえ、実際のところ、このような問題については、管見の及ぶ限り、未だ十分には論究されていないように見受けられる。この点において、琴渓は今だに〝謎の人〟の域を脱していないのである。

そこで本稿は、この中神琴渓の医学思想を解明するに当たり、まずその基礎的研究として、彼の『生生堂雑記』・『生生堂医譚』・『生生堂養生論』・『生生堂傷寒約言』等の著書において見られる引用書目の分析を通じて、彼の学問的傾向を窺い、以てその医学思想の解明に資せんとするものである。その著述における引用書目の傾向は、自ずとその学問の傾向を明瞭にし、かつその思想自体までをも明らかにするものであると考えられるからである。

そこでまず、琴渓の上記論著四種における引用書目は、総計二十九種、その内のほとんどが『論語』・『孟子』・『史記』等の中国の古典である。今回は、それらの内でも群を抜いて引用回数の多い『論語』からの引用について報告したい。

『論語』からの引用について、何よりもまず注目されることは、その全ての引用文において、一つたりとも不正確な『論語』（の章句の）理解や、あるいはそれに起因する不的確な引用がなかった、ということである。つまり言い換えれば、確かにいささか望文生義の嫌いがある一文もありはしたが、それは彼の独自の主張に引かれたまでのことであり、全体として、彼の『論語』理解は極めて正確であり、その正確な理解に基づいて、極めて的確な引用が行なわれていたのである。

その正確な引用は、多くの場合、和文（書き下し文）で、しかし又、かなりの割合で原漢文や、時に和漢混合文の形を取り、時に原文そのものと同一の文章として、あるいは、時にその内容を適宜まとめて摘録する形で行なわれていた。更に言えば、その引用たるや、ただ単に一つ一つの『論語』の原文を個々に引用するだけでなく、一つのまとまりを有する文章において複数の原文を組み合わせて引用してその脈絡全体を構成する、更に一つの引用文の中に複数の原文を織り込むなどして、正に自在闊達な筆致を見せるのであった。

要するに、琴渓は、『論語』の内容を熟読玩味して、その文章それぞれを、ほとんど暗唱するほどにまでなっていたのである。つまり、彼はそれを〝自分のことば〟にしてしまうほどに、『論語』の内容を広くかつ深く読み込んでいたのである。

琴渓の『論語』熟読は、決して所謂〝儒者〟のそれではない。つまり、彼は『論語』の内容に、儒教の教義や教説を求めてはいない。ただ、おのが教養に資しているのに過ぎない。とは言え、それは既に彼の〝ことば〟になっている。言い換えれば、彼の思索の脈絡は、『論語』に由来するところの〝ことば〟によって構成され、展開されている。まことに、この『論語』一書こそは、琴渓の〝思索の糸〟だったのである。

（平成十五年十月例会）

❊❊❊紹　介❊❊❊

川上　武編著
『戦後日本病人史』

浩瀚な本書を一言で紹介するなら、病人・障害者の処遇の側からみた戦後医療史への問題提起といえる。今さら云うまでもなく、編著者、川上武氏は『日本の医者』（一九六一年）、『現代日本医療史』（一九六五年）の著書にみられる現状および歴史的分析を軸に、戦後日本医療に系統的な発言を続けてこられた。その著者が戦後医療史の重要な鍵の一つとして患者運動・医療告発運動に着眼、医療の当事者、病人の処遇が明らかにされていないのに思いいたり、新たな領域をきりひらかれたのが『現代日本病人史』（一九八二年）である。病人の処遇を規制する疾病及びこれに対処する医療技術の進歩と